

# 仏様のおはなし新シリーズ第99集「声に姿はなけれども」

うちでは3歳になるマシューという犬を飼っています。たまに近所に散歩に行くのですが、家へ帰る際に通る道で、いつも同じことが起こります。どこからともなく別の犬が吠えるのです。近くの家で飼われている犬が、マシューの気配を察して警戒しているのでしょうか。しかし、どこを見てもその吠えている犬の姿は見当たらぬのです。どこにも姿は見えないのでですが、たしかにそこに他の犬がいることは分かります。

わたしはふと、阿弥陀さまに似ているな、と思いました。阿弥陀さまという仏さまは本來どんな仏さまですか、と親鸞聖人にお尋ねしますと、「色もない、形もない、私の心で考えることもできず、言葉で言い表すこともできない仏さま」とおっしゃいます。まるで空気のような仏さまです。しかし、そんな仏さまだけなら、私のほうから知ることもできないし、見ることもできません。接点がまるでありません。

そこで、阿弥陀さまは長い間考えられました。私の想像を遥かに超えた、長い長い間考えられて、一つの答えがでました。「よし！聞こえる仏になろう！」と。「南無阿弥陀仏」という言葉の、声の、仏さまになることを選ばれました。阿弥陀さまの方から姿を変えられて、私の耳に南無阿弥陀仏と聞こえ、私の口から南無阿弥陀仏とこぼれ出る仏さまになられました。



とても不思議な話ですが、「南無阿弥陀仏」という言葉が阿弥陀さまそのものだとうのです。一度お念佛をしてみてください。耳に阿弥陀さまが入つてきました。口から阿弥陀さまが出てきてくださいました。お腹が空いた時に「ご飯」と言つても、お腹は満たされません。夏の暑い日に、「クーラー」と言つても涼しくはなりません。しかし、「南無阿弥陀仏」とお称えするところに阿弥陀さまがご一緒くださいます。お念佛を申すということは、私が一人ぼっちじゃない、ということです。いつでも、どこでも、そして今、ここに阿弥陀さまがご一緒くださいます。

最後に、広島にいらっしゃいました高松悟峰（1866～1939）という先生のお歌を紹介させていただきます。

声に姿はなけれども　声のまんまが仏なり  
仏は声のお六字と　姿を変えてわれにくる